

第二期 第九十号 (二版) (無料)

# 音信不通

本のビオトープ

学びあう人々のために

2024.01.10 定有堂書店 発行

## 特集「わたしの定有堂」

反本屋学

定有堂書店と私

三六年目の「読む会」

黎明期の定有堂の思い出

「鳥取県 鳥取市 元町 121」

街に本屋がないなんて

はじまりはお客さん

定有堂と、二〇二三年の私

鳥取あれこれ その八十九

私にとっての定有堂

「本屋」について考える

不真面目な寄稿者

色なき風の吹く本屋

汽水のほとりから (34)

奈良 敏行

三砂 慶明

岩田 直樹

齋藤 明彦

石橋 毅史

三宅 玲子

浜辺眞砂代

高木 善祥

内田 克彦

古賀 啓三

板野 円香

萩原 俊郎

木元 健二

小原 修治

わたしと定有堂

本を作る側から (10)

一書肆の思い出

本のある場所へ

定有堂と私

そのものたらしめるもの

…… 編集後記

松田 裕史

村瀬 謙介

ムラカミヒロミ

三浦 永理

あきの素生

ドラマリア



## 反本屋学

奈良 敏行

(定有堂 主人)

定有堂の四十三年、「初発衝動」のその輝きを失わないために、幾度も組み替えをくり返してきた。棚から本がすべて消え去った後、まだ組み替えというものが存在するのだろうか。終わったところから始まる何事かがあるのだろうか。四十三年目に再発見されたものがあつた。定有堂教室が自然発生的に発足したとき、教室だからといって黒板を持つてきてくれたひとがいた。黒板があるのならば、論語の

冒頭「学而」から書写して、額をその横に飾ってくれたひともいた。

《学びて時に之を習う、亦説ばしからず乎。朋有り遠方より来たる、亦樂しからず乎。人知らずして慍らず、亦君子ならず乎》

いつ頃からか忘れたが、この額は本屋の横の通用口から入って階段を登り切った扉の上に移動した。定有堂教室の出入り口だ。風景に溶け込んで、気づく人は誰もいない。本屋を閉じて四カ月後、三砂慶明さんの案内で辻山良雄さんが訪ねてきて、これが定有堂なんですねと額と言葉を目にとめ、連載中の雑誌『熱風』に発見を記してくれた。定有堂が終わったとき、その背骨のようなものを辻山さんが探して、この言葉が蘇った。

本を読んでいると朋に出会う、そういうものだろうか。実際には本に沈み込んでいる人は孤独だ。語り得ないものに出会い沈黙するしかないからだ。本を読んでも朋はやってこない。正確にはやってこないわけではないが間に合わない。人の一生は短い。小冊子『音信不通』のテーマは、自分のつもりではこの「間に合わない」というのを、隠れた主題とする。届かない、間に合わない、なんとというスケールの大きな期待だろう。そして孤独を支える励みだろう。初発からつづく朋との同行二人の充足感がここににある。

四十三年が過ぎ、棚の構成が消え失せた後、定有堂は再発見される。定有堂開店に遅れて生誕した三砂慶明さんが、この訪れるはずのない朋だったのだろうか。驚くべきことに間に合ったというべきだろうか。本とともに消え失せようとしたわたしの四十三年の言説や行いを消滅からすくい上げた。そして三砂さんのナラティブ・ストーリーに組み換えていった。『町の本屋』という物語へと簡潔にねりあげた。定有堂という本屋の初発衝動の源を書き残し、ゲラ刷りを読んだ本屋さんの、「一周遅れて新しい」と「届け先がある」という声を教えてくれた。

衝動の波紋は「町の本屋」の「町」にあると思う。果たしてこの言葉は新しいのだろうか。「町」は本来田んぼの広さを測る尺貫法の長さの単位だ。一町六十間。「街」は道路で町を連結する。この衝動は、「街の本屋」という未来志向の明るさを、「町の本屋」というプリミティブの薄明へと巻き戻していく。

本屋を始める人の初発衝動は狭いものだ。始めたいから始める。始めたがなかなか軌道に乗らない。だったら当分土日だけの開業にして他の日はアルバイトをしようか。ふと我にかえればこの初発衝動は新しい。この新しきにハッと気がつくならばそこに「届け先」がある。

昔、美術界の潮流と無関係な美意識しかもてなかった、

狭く生きる人々の「新しさ」を発見して、フランスの画家デュッフェはアールブリュットと名付けた。三砂さんの発見もそのようなものだったのだろうか。言説や行いは断片的で脈絡のないものだ。そこにプロットを導入したのが三砂さんだ。わたしは棚の本とともに言説や行いを、「奈良は終わった」という言葉で人為(ノモス)から自然(フユシス)へ解き放っていた。解き放たれたものを拾ったこの文集は、だから三砂さんの形而上学だ。

人為(ノモス)から自然(フユシス)へかえるのを反哲学というのだが、三砂さんのナラティブは反本屋学へと志向するのかもしれない。

2023.12.12

・吉川幸次郎 『論語』中国古典選3朝日文庫 1978

・小冊子『熱風』スタジオジブリ

奈良敏行＋三砂慶明編集

### 『町の本屋という物語』

— 定有堂書店の43年 —

作品社刊

2024年2月下旬予定



定有堂教室 「読書室ビオトープ」小説を読む会です

1月25日 木曜日 第8回 19時半から

テキスト 『鼻行類』平凡社ライブラリー

予告 2月8日は川上弘美『某』

定有堂教室 「読む会」 (岩田直樹氏 選書)

1月23日 火曜日 19時から

テキスト 牧野百恵『ジエンダー格差—実証経済学は何を語るか』 中公新書

定有堂教室 「ドウルーズを読む会」

(講師 岩田直樹氏 公立鳥取環境大学特任教授)

2月1日 木曜日 19時から

テキスト 木田元『反哲学史』講談社学術文庫

副読本・木田元『反哲学入門』新潮文庫

太極拳教室 (会場 定有堂二階・他二カ所) 葉香クラブ

毎週 水曜 19時半から 市役所麒麟スクエア

・土曜 13時半から 産業体育館

講師 日本武術太極拳連盟 四段公認A級指導員(ナラ)

三段 公認B級指導員(みちる先生)

# 定有堂書店と私

三砂 慶明

(「読書室」主宰)

私が定有堂書店に通いはじめたのは、ここ最近のことで、2020年の夏からだ。

自分の年齢すらろくに記憶できない私が、なぜそのことを覚えているのかといえは、そのときのことを奈良敏行さんが『音信不通』49号(2020年7月)に書き留めてくれているからだ。『音信不通』を読み返すと、その次に定有堂書店にお邪魔したのが65号(2021年11月)で、恐れ多くも拙著『千年の読書』のゲラをお送りして感想をいただいている。続いてお店を訪ねたのが『音信不通』78号(2022年12月)だから、ふりかえってみると一年に一度、私は奈良さんのもとをたずねている。

三年でたった三回お店をたずねただけの私が書くのは恐れ多いことだが、多くのお客様と同様、私にとって定有堂書店は格別の存在で、自分自身の人生を導いてくれた唯一無二の本屋になった。最初の訪問で、私は奈良さんから『千年の読書』でどうしても書けなかった新しい働き方のピン

トを授けていただいた。二度目にたずねたときは、編著『本屋という仕事』の核になる焚き火のコンセプトを奈良さんから頂戴した。三度目は、定有堂書店の読書会で、何となく参加してみたら、その後の人生が決定的に変わってしまった。定有堂書店の「ドウルーズを読む会」に参加して、これからは読書会だと胸が熱くなった。

これからも読書会に通って勉強しようと思っていた矢先に転機が訪れる。その知らせを届けてくださったのは、定有堂書店でご縁をいただいた松田裕史先生だった。奈良さんから届けられた『音信不通』79号(2023年1月)で、定有堂書店の閉店を知る。いてもたってもいられなくなるが、残念ながら物理的に私にできそうなことはほとんどなかった。でも、できそうなことがたった一つだけあった。それが奈良さんの本をつくることだ。

出版社でもなく、編集者でもなく、さらには直接、奈良さんから頼まれたわけでもないのに、定有堂書店の本を作ろうと決心した。おこがましい話だが、本は人そのものだから、定有堂書店がもし本当になくなったとしても奈良さんの本があれば、読者の心の中に定有堂書店は永遠に存在し続ける。そして、きつと、私が奈良さんの言葉に導かれたように、多くの読者の人生を北極星のように導いてくれるに違いない。

早速、3月28日の「読む会」に参加した帰りに『音信不通』の編集長の小林みちるさんに相談すると、それは素晴らしい考えですね、と背中を押してもらえた。「読む会」の岩田直樹先生からも、「何でも言うてくださいね。できることは何でもやりますから」と励みになる言葉をいただいた。お二人の言葉を聞いて、迷いが消えた。がんばろうと思った。

お店が閉店してから、何度かお店にお邪魔して、奈良さんから貴重な資料をお預かりした。もう少し遅ければ処分していた、と伺い、間に合つてよかつたとはほつとした。

ダンボールの中に保存されていた原稿の束を、妻と二人で、一枚ずつ整理していった。40年前の原稿から、リーフレットやチラシ、取材記事、ミニコミ誌がまるで宝物のように眠っていた。原稿を時系列に整理して、妻と二人で、少しずつ読んでいくと、そこには私たちが知らない定有堂書店の姿があった。定有堂書店の43年の歴史を振り返ってみると、同じ店とは思えないほど、変化し続けていた。

最初、定有堂書店は「素人」の本屋だった。それが来店するお客様の言葉で、「人文書」の本屋に変わった。次に「カフェ」の時代がくれば、「カフェ・ブック」という具合に、時代とともに本屋の中身も変化し続けた。驚いたのが最後の变化で、それが「縮小」だった。私たちは縮小と

聞くとマイナスのイメージを抱きそうになるが、奈良さんの考えは180度違つていた。もともと日本には、茶道や懐石料理、盆栽、箱庭など、縮小を美しいとする文化があると言き、その延長線上で、本屋の新しい未来をつくろうとしていたのだ。元々、本が好きな人が、本屋を開き、それが書店員の「聖地」と呼ばれるようなユートピアを作り上げた。そこで終わりになるのではなく、奈良さんはその先に何があるのかを貪欲に探し求めた。

定有堂書店は、まず書店で、読書会を開催していて、ミニコミ誌を作っていた。奈良さんは書店を閉じても、読書会と『音信不通』というミニコミ誌を続けている。つまり、規模は縮小しても、本と読者との交流をつなぐ回路は閉じておらず、それどころか今なお温め続けているのだ。

奈良さんの文章を拝読していると、本屋とは何か、ということを問われている気がする。今、奈良さんの言葉をまとめた本の準備をしている。タイトルは、『町の本屋という物語 定有堂書店の43年』。地域の本屋が、文化の拠点になれることを証明した43年間の奇跡の物語だ。

すべての物事は、はじまつたら終わる。でも、終わりからはじまる物語もある。この本にはそのことが記されている。

## 三六年目の「読む会」——消滅寸前からのV字？回復

岩田 直樹（公立鳥取環境大学特任教授・

「読む会」選書人）

昨年四月一八日に店舗としての定有堂書店は閉じた。本号は「わたしの定有堂」を語り合う場である。とすれば、定有堂にまつわる「昔話」をすべきであろうか。

しかし、定有堂「書店」は終わっても定有堂は生成変化を続けている。閉店直後の五月から主に小説を読む「読書室」がスタートし、閉店六ヶ月前から「ドウルーズ」を読む会（哲学を楽しむ会）がスタートした。一九八八年開始の「読む会」は今年一月で第二期三〇二回（第一期から通算四一七回）を数えるに至っている。太極拳教室葉香クラブも継続中だ。（私が参加するのは「読む会」と「ドウルーズを読む会」の二つ。ホームページをご覧ください、お気軽にご参加ください。）

目の前で起こっている日常のあれこれを客観視することは容易ではない。そんなことをつらつら考えていると、書くことが見つからず困り果ててしまった。

私は「昔話」が苦手である（前号参照）。無理矢理に著しく小さい記憶容量の中から、今考えてもなぜそうなったのかわからない「読む会」のV字？回復について、か

すかな記憶を絞り出してお話しすることにしよう。

「読む会」を主宰していた濱崎洋三先生（一九三六—一九六）が亡くなったのが一九九六年九月。その二年前に濱崎先生のお誘いで「読む会」に参加することになった私は、先生の死によって「読む会」がどこへ向かうのか、あるいはこのまま消滅してしまうのか、とても不安だった。

濱崎先生が読む本をお決めになっていたから、何を読むのか、それが最大の問題だった。九六年九月以降のリストを見ると、大澤真幸、木村敏、佐々木力、上垣外憲一、長谷川宏、山之内靖、立岩真也、今村仁司、ハバーマス、鎌田慧、西川長夫、レヴィナス、柄谷行人らの本が並んでいる。濱崎先生がお選びになったといっても不思議ではない本ばかりだ。人文書の読書会であり、「旬」の書き手を選べばこうなったのだろうか。（現在参加のZ世代の皆さんはこれらの著者のうち何人を知っているだろうか。）

先生のカリスマ性は余人をもっては代えがたい。濱崎先生が亡くなってすぐに離れていった方もいる。一〇名前後いた常連たちが一人、二人と来なくなつた。

今でも鮮明に覚えている光景がある。雪は降っていないが、たがとても寒い夜だった。丸い石油ストーブを囲んで私を含めた三人が何かを読んでいる。「読む会」はもうそろそろなくなるのだろうか。そう感じていた。

参加者数が多ければよいというものでもない。でも、少なすぎるのはとても寂しい。発足してから一五年は経っていたから、閉じるときがいつ来てもおかしくはなかった。

「読む会」についてこんな質問を受けることがある。「一九九八年秋からは誰が選書していたのか」と。これがよくわからないのである。参加者たちが「来月はこれがいいぞ」とその都度提案していたのか。

私が選書を本格的に引き受けるようになったのは二〇〇八年である。奈良さんから「半年くらいのスパンで本を選ぶと、興味のある本はじっくり読み、そうでない本は軽く読むといったメリハリのある読書ができます」とアドバイスをいただいたからである。二〇一三年以降は一年単位で選ぶようになった。

それまでは定有堂書店二階で開かれる「読む会」の本と一階の店舗で売られる本は連動していなかった。やがて「読む会」一年分の本が一階レジカウンターの前に並ぶようになる。「読む会」メンバーが買うだけだったら一〇冊ほどなのに三〇冊から四〇冊が売れていった。ベストセラーのような売れ行きだ。「読む会」参加は敷居が高いが、「自分じゃ絶対に読まないけど、こんな読んでいるんだ」と思って購入する人が出てくる。秘密結社的な閉じた「読む会」が少しだけ街に開かれた存在になっていった。

「読む会」のスタイルもいつの間にか変化していく。「本を読む会」が「本を読んで来なくてもいい会」になったのである。

向井和美さんの『読書という幸福』（岩波新書、二〇二二年）には、三〇年近く参加されている読書会の六つの方針が列挙されている。①できるだけ欠席しない、②課題本は必ず読み終える、③ほかの人の意見を否定しない、④課題本をリスペクトする、⑤ひとりで喋りすぎない、⑥雑談をしすぎない。

向井さんの読書会が掲げる方針は至極真つ当である。「読む会」では③以外はあまり当てはまらない。いろいろな事情があるから欠席しても大丈夫。忙しかったら本は読めない（読む気にならない）。この考え方はちよつと、と指摘するのは読み手の特権だ。本に触発されて思いついた話題をおしゃべりするの楽しい。雑談も同様。

私が「ゆるい」人間だからか、この雰囲気はとても居心地がいい。社会学者オルデンバーグが提唱する「サードプレイス」の読書会バージョンなのだろうか。

ここ数年、消滅寸前だった「読む会」に新しいメンバーが増えてきた。一冊の本を媒介にして見知らぬ者たちが集うことは「奇跡」ではないか。私はそう思っている。

## 黎明期の定有堂の思い出

齋藤 明彦

有能な執事（元鳥取県立図書館長）

最初に奈良さんと出会ったのは、三角公園にあったダルジユロスという喫茶店だったんじゃないかな。マスターから「書店を開こうという人がいるので、紹介するから会ってみてくれますか？」。で、お店で会ってお話を聞き熱意や人柄に触れて、自分ができる範囲で応援しようということになったと思う。

といっても大したことはやってない。

①書店をオープンする時本が十分になかったので、奥の棚を埋めるために京都から持ち帰った陶磁器類を並べてみた。本棚に徳利や壺が並んでいる姿を想像してみてください。また、そのころいくつかテーマごとに集めていた本の中から、奈良さんのリクエストで料理関係の本のコーナーを作った。大学のころから「専門料理」などの専門誌や文庫、単行本など集めて読んでいたけど、配置場所が新書文庫のコーナーだったので小難しい調理技術や写真満載のムックは置けず、荻昌弘・檀一雄・伊丹十三などの「男の料理」とかいった文庫本中心に、それでも結構な数並べて

いた。しばらくたってからその本は引き上げただけでコーナーは残り、今度は私がそこから買う立場に。

②そのころはまだ土曜日が午前勤務だったので、お昼を食べたら定有堂に行つての本漁りを習慣化。それまで、今は無き富士書店で店頭買いよりも職場（県庁）を回つてくれる外商で発注することが多かった。花井さんというすばらしい方がいて、こちらがこういう本を読みたいとか、こんなことが知りたいとかいろいろ話すと、いくつかの本を提案してくださる。もちろん本の名を告げて買うこともあったけど、的確なアドバイスがとてもありがたかった。それが定有堂との二本立てになり、花井さんが来られなくなったこともあって定有堂に一本化。でも、いい本屋さんについていなくてもそこについて楽しめるし、奈良さんが適当な本を勧めてくれるので、しこたま買っちゃうのよね。物理的に重い本が嫌いだつたから支払いに困ることはなかったけど読むのが大変で、いつも10冊近くを並行して読んでる状態。月一回のつけ払いで購入してたから、請求書についてくる購入本の一覧をそのまま私の蔵書リスト代わりにずっと保存してました。

③これは黎明期より少し後だけけど、奈良さんから図書館の人を紹介してほしいと頼まれた。図書館に納入したいのだけどどういふ風にしたらいいのかわからないとのこと。

私は財政課で教育委員会を2年担当し図書館の査定をしていたので、選書のいい定有堂さんに参加してもらおうのは図書館にとつてもメリットがあるだろうと思ひ、担当課の信頼できる課長補佐を紹介。そこからは何もしなかつたけど、図書館への納入が始まつた。のちに私が県立図書館長になつた時には、なくてはならない存在として県立図書館の品そろえに大きく貢献していることを知る。奈良さん、頑張つてくれたんだなあ。

定有堂の影響の一つはコミックを買つて読むという習慣ができたこと。

まんがは小学生の時からずっと読んでたけど、基本的に雑誌で読むスタイル。それが、定有堂で普段読んでる雑誌に掲載されてない、ちよつとマニアックなやつを勧められずばずぶと沼に。諸屋大二郎、ますむらひろし、大友克洋などなど。青池保子や山岸涼子など少女漫画系はそれまでほぼノーマークだった。これ以外にもその漫画家のコミックをほぼそろえたものもあり、部屋をコミックが占拠。独身の頃はよかつたけど後に結婚し子どもができ、スペースがきつくなると迫害され、ついにコミックは実家送りとなつてしまふ（合掌）。

谷口ジローに初めて触れたのも定有堂。たしかのちに市

立図書館司書となる西尾肇さんに勧められたんじやなかつたかな。総じてこれらとの邂逅はストレスの多い仕事の疲れをひととき忘れさせてくれ、いまでも少しずつだけ買い続ける楽しみを与えてくれた。

黎明期といえは、一度おうちにお邪魔して晩御飯をこちそうになつたことがあつた。奥様も一緒にいろんな話をし、楽しかつたことだけは覚えてる。何を話したかはきれいさっぱり忘れてるけど、お二人と話す時間の心地よさと柔らかな雰囲気だけは忘れてはいない。

近年は奈良さんが主宰する太極拳の会に、全く部外者の私が顧問とやらになつたりしてお付き合いはつづいていた。我が家から徒歩で3分ほどの近きにあつた定有堂書店。なかなか本が読めなくなりお店にはたまにしかいかなくなつてはいたけど、閉じたシャッターはやつぱりさびしい。すぐそばに毎日お昼を食べに行くお店があり、定有堂の横を通るとなんだかね。

鳥取県立図書館を訪れる全国の図書館員が、併せて見たい、できれば話をしてみたいと思う書店。彼らにも影響を与えた存在が今は無くなつたけど、きつとそこで受けた刺激があちこちの図書館に残っているだろうと思う。彼らといつか定有堂の話をしてみたいものだ。

# 「鳥取県 鳥取市 元町 121」

石橋 毅史

(作家・出版ジャーナリスト)

二十八歳になる年に入った会社を、三十九歳でやめた。出版業界の専門紙を出す会社であった。仕事は面白く、熱心でできたと思う。でも十年で限界が来た。フリーランスになって新聞記事より長い文章を書こうと思ったのだが、具体的になにを書きたいかはわかっていなかった。

会社から持ち帰った資料を整理していた或る日の昼下がりに、そうだ、旅に出ようと思いついた。車で、すこし遠くまで行こう。簡単な身支度をしながら頭に浮かんだのが鳥取だった。山陰方面は大山に行ったことがあるだけで、そのときも取材先の他はどこにも寄れなかった。鳥取砂丘や、初めての場所をたくさん見よう。

僕の自宅は東京都練馬区にある。出発前、カーナビゲーションに目的地を入力した。「鳥取県 鳥取市 元町 121」。すると走行距離は「720km」と出た。いい感じだ、このくらいの長さを走ってみたかったんだ……行く宛が皆無というのも心許なくて、ずっと気になっていた書店を目

指すことにしたのである。鳥取には翌日の早朝に着いた。まずは砂丘を歩き、あとは気の向いた所で車をとめ、数日かけて鳥根の出雲大社まで行った。このときの定有堂の記憶は、じつは少ない。それより、また来ることになるだろう、いや何度も来るかもしれない、と思った。

二〇一〇年二月の出来事である。この年の僕は、東北信越、東海、関西の本屋を車で訪れ、鳥取は十二月に再訪した。翌年には、それらの旅の記録をもとにした初めての本を書いた。その後も本屋を巡る小さな旅の記録をいくつも文章にしてきたが、やはり自宅から車で出かけることが多かった。現地での細かい移動に便利、深夜も動ける、本をたくさん買って持ち運べるなどの利点があるからだが、難点も目立つ。大きな移動の時間効率が悪い。目的地に着くまでの間に目にすべきだったものをいくつも通りすぎてしまう。長時間の独り運転は疲労が激しく、気分が鬱々とすることもある。

それでも車にしたのは、カーナビゲーションに初めて定有堂の住所を入れたあの瞬間の、なにかが転がり始めた感覚を忘れられなかったからだ。遠くの知らない町の、良さそうな本屋を目的地にすると、ドラマが始まる。僕はそこで見聞きしたことを書けばいい。

もっとも定有堂については、何度も訪れたけれど、初め

ての本に一章を割いて登場してもらって以降、取材が目的だったことは一度もなかった。じゃあ何のために行ってるんだ、と知人に不思議がられたことがある。たしかに、人によってはやや酔狂な行動に映るかもしれない。

東京から西の、名古屋、京都、大阪、神戸、岡山、和歌山などへ行った後、鳥取まで足をのばすことが多かった。行く先々の本屋の話を反芻しながらドライブを続け、最後に定有堂にたどり着く。営業を終えた薄暗い店内や近くの食堂で、旅の成果を店主に聞いてもらう。店主はそれを受けて感想を言い、関連する話を聞かせてくれる。僕にとっては、その旅の修了式のような、追加の補習のような時間だった。太極拳の一番弟子さんが同席することも何度かあり、師匠の話に合いの手を入れたり、不確かな情報を補正してくれたりした。彼女も一緒だと、僕も束の間、門下に入れてもらえた気分になった。

店主はいつでも僕を歓待した。この世界でただ一人の、貴重な客人としてもてなした。こちらに向ける目、話を聞く姿勢、なにげない一言から、それは伝わってきた。棚を眺めていると、本の扱いも似ていると思うことがよくあった。背表紙の並びは、番号順でも、世間でよく使われるジャンルやキーワード別でもない。文脈で繋がっているというのと、ちよつと違う。一冊一冊に個別の存在感がありな

がら、どの本も売場に溶け込んでいるのだ。

一人ひとり。一冊一冊。そんな空間で、いろんな本を手渡されてきた。なにを挙げたらいいか迷ってしまう。『岡部伊都子へのめぐる想ひ 櫻レクイエム』にしよう。二度目の訪問の、もう鳥取を離れようという頃、店主は、岡部伊都子さんって読んだことありますか、と棚から抜いて、これはいい本ですよ、と僕に手渡した。そして、その前に見せてくれた『詩集 流れの道で』（花井満）も重ねて、これとこれは差しあげましょう、と言った。

本屋が、店の棚に並べた商品の本を、その場でプレゼントしてくれる。初めての経験に、僕は狼狽した。嬉しかったし、同時に畏怖の念も抱いた。とっきの判断でそんなもてなしができる定有堂という書店の、経営面での強さ、凄味を感じたのだ。客と本との一期一会の出会いを大切にする、自由な本屋であり続けるために、裏側ではとてもシビアに闘ってきた人なのではないかと思った。

コロナ禍などの影響で、二〇二〇年からは間が空いた。二〇二三年は、久しぶりに車で一度、飛行機でも一度、鳥取へ出かけた。定有堂は閉まり、僕は五十代になり、車もややパワーダウンしたものに替えなければ、カーナビゲーションにはまだ住所が入れてある。

# 街に本屋がないなんて

三宅 玲子

(ノンフィクションライター)

あちこちに出かけてきたが、鳥取は未踏だった。

地名から思い浮かぶのは砂丘のみ。とっとりを漢字で書くときには鳥が先か取が先か迷ってしまう。そのような貧しい知識しか持たないこの地に足を運ぶことになったのは、ひとりの書店主から話を聞いたことによる。福岡市で独立書店ブックスキューブリックを営む大井実さんだ。

大井さんは三十九歳だった二〇〇一年に、福岡市の瀟洒な商業エリアで十三坪の書店を開いた。書店業の冬の時代はすでに到来していて開業に賛成する人は誰もいなかったが、一緒に頑張ろうよ、とただひとり大井さんを励ましたのが、鳥取市にある書店の主だったというのだ。大井さんはその一言に力を得て、孤軍奮闘、開業にこぎつけた。現在、ブックスキューブリックといえは、独立書店の西の雄として知られた存在だ。

鳥取県は四十七都道府県でもっとも人口が少ない。大井さんが開業前に影響を受けた唯一の独立書店がそのような静かな土地に存在すると聞いた当初、私はその事実がピン

とこなかった。試しにウェブサイトを開いてみると、クラシックな「ホームページ」が現れた。だが、情報はこまめに更新されている。長く発行されているミニコミ誌もあるようだ。書店名で検索すると「書店員の聖地」なるワードが飛び出てきた。簡単には掴みづらいものの、何やら気になる。幸い、編集部のデスクは行っておいでよ、と言ってくれる。思い切って訪ねてみよう……。

独立書店を訪ねる連載の第四回のための取材、それは二〇二〇年一月だった。その日以来、三年間に七回も定有堂書店を訪れることになる。しかもそれはコロナ禍とほとんどびったり重なるのだ。

脳と心の関わりはいまだ解明されていないという。「そもそも脳の全容はまだ一割もわかっていない」と、ある精神科医から聞いたことがある。

定有堂書店の棚は風変わりだった。五十坪ほどの店内の壁を埋め尽くした棚のあちこちに「過剰適応をやめる」「小さな道しるべと自己肯定」といった言葉が、脈絡なく貼られている。その饒舌な棚に並べられた本の背表紙を一冊ずつ目で追っていくうちに、心に変化が訪れた。頭の中でぐるぐると考えている取材の課題について、この角度からアプローチを試みよう、とひらめきを授けられた。ややこじらせている人間関係について、まあ、そう悩まずともだ

いじょうぶよと話しかけられているような気持ちにもなつた。そのとき、きつと脳内には穏やかさや前向きさを促す脳内伝達物質が出ているに違いない。こうして考えてみると、本屋とは心の調子を整え柔らかさを取り戻す場所であり、極めて人の心に関わる実業だ。

三年の間に七回も訪ねたいちばんの理由は、何と云つても、鳥取に続いてきた本と本屋と人の関係性の物語に惹かれたことだ。明治初期に始まった今井書店が鳥取県内の地域図書館の普及に尽力したこと、その中心人物でのちに同社の社長となる永井伸和氏が、開店当日に花束を抱えて定有堂を訪ねて以来、大学の後輩にあたる若き店主奈良敏行さんに何くれとなく目を配ったこと。鳥取県史の編纂に尽力した高校教師濱崎洋三さんが定有堂書店で始めた「読む会」を、後進の数学教師だった岩田直樹さんが引き継いで、現在まで三十年以上も続けていること。本に出会う場所であるだけでなく、定有堂書店は本と人がつながれていく中継地点として、鳥取の本をめぐる歴史に重要な位置を占めていた。

定有堂書店を起点にたどる鳥取の本と風土の物語は、書店という場所の果たす役割の広さと深さを教えるものだった。奈良さんの本を商うことへの真剣さと鳥取の本を求める人たちが呼応し合い、ともに定有堂という場所を育んだ

のだろう。

連載はその後も続き、北は北海道から南は熊本まで十四の書店を訪ねたが、早い時点で定有堂書店を知ったことによつて、書店を土地と人との関係の角度から捉える、そんな取材のヒントを授けられたように思う。

三年前と違い、今の私は鳥取についてオリジナルのマップを描くことができる。地図には定有堂の「読む会」で出会った人たちの似顔絵を書き込みたい。本を読み、自分で考えて、自分の足で歩いている人たちだ。二度、「読む会」に参加する機会を得たが、どの回も、本を読み、自分で考えることを諦めない人たちが、穏やかに堂々と意見を交し合っていた。経済至上主義に支配された世の中に対して、それとは異なる人生の歩き方を手探りしている人たちに、土地の潜在力を見る思いがした。定有堂書店は鳥取の人たちがどう生きたいかを支えていた。

二〇二三年春に看板を降ろしてからも、図書館でのフォーラム、「音信不通」の継続、「読む会」の広がりなど、定有堂はむしろ賑やかさを増したようだ。奈良さんは、本を商う場所としての「本屋」から、「本屋」という生き方へと、さらに研ぎ澄ませている。翻つて自分はどこまで取材して書くことを続けられるだろうか。

## はじめりはお客さん

浜辺 眞砂代

(元「定有堂ジャーナル」編集長)

定有堂ジャーナルを奈良さんと一緒に作っていた頃、定有堂さん（奈良さん）とはどういう関係なの？ どういう縁なの？ とよく聞かれた。返事は「ただのお客さん」。

ある日、本を買いに行つて、会計を済ませた時、「あと3分（1分だったかも）で休憩に入るんですが、事務室でお茶でもどうですか？」「はい」が始まりでした。「えっ、道端でお姉さんお茶飲まない？ と同じ始まり？」と言われるが、そうでもあるし、そうでもない。

お互いの背景を知らないところで、お茶を飲むことになった、はそうでもある。「浜辺です」「知ってます」（確か。本を注文してたから）。「奈良です」「知ってます」。

書けば間抜けだ。

さらに、「どんな本を買つたの？」と突っ込まれることもあるが、覚えていない。が、背伸びしたような本ではなかったことだけは断言できる。そんな本は読んでいなかったし、ここで格好つけたいとも思っていないかった。

当時、定有堂の事務室では「ブックレット定有」というミニコミ誌を作っている人たちが集まってワイワイやっていた。ガリ版刷り。鉄筆でちまちな書き、インクを付けたロールをコロコロして印刷。原本が破れたらそこまで。最大刷れて200枚くらいだったか？ よく服にインクが付いてショックを受けた（取れないんだ、これが。ジャーナルでは進化してコピーになりました）。

定有堂に出入りしているお姉さんやお兄さんの仲間に入れてもらつて、嬉しかったし楽しかった。少しばかり背伸びもした。その後、みんなばらばらになり、廃刊。

そういえば、あの頃若桜街道にあった富士書店本店。2階の文庫売り場のお店の人とレジで時々雑談していたが、その人を介してお薦めの本のリスト（解説付き）を下さる方がいた。本屋さんって人と人を繋ぐパワーが渦巻いてる？ 私のがどんなふうに伝わっていたのか、「うーん、誤解されてる」と思う本もあり、結局お会いすることもないままだった（最後の署名で名前だけは知ってる）、それはそれで面白かった。

お客さんとしてお店に出入りし続けている中、「こういうのがあったらいいね」「じゃあ作ろう」。レジの前での立ち話。10日後に「定有堂JOURNAL」No.1発行。月刊。ほぼ10年続いた。

そんな簡単に始まったジャーナルだが、巻頭連載をいただいていた井狩春男さんが『オレンジページ』を取り上げられたときは編集部から手紙が届いた。取り上げた作家の方からハガキが届いたこともあった。「えっ、著者にまで届くの？で、目を通してくださるの？」とびっくりした。

ありがたいことに、県立図書館の郷土資料のコーナーに置いてくださったり、日本中のミニコミ誌を集めている図書館から、うちにも送ってと依頼があったりした。発行部数が増えることが目的ではないけれど（無料配布だしね）、こういうことで少しずつ広がっていつていることが実感でき、やっぱり嬉しかったし励みにもなった。

ジャーナルは執筆者、手に取ってくださる人、実務（ワープロ入力し校正。コピーで枠に収まるよう且つ読めるよう縮小をかけ、あとは鋏とノリで切り貼り。B4用紙にコピーして、重ねて折って完成。その後、発送作業）、どの立場の人も当事者だったように思う。

定期購読を希望の方には切手を送ってね、とお願ひしていたが、寄贈分の切手代、コピー代、用紙代、封筒代など費用は全て奈良さんが負担してくださっていた。

一応本（や映画）の紹介誌のふりをしていたが、日頃思っていることを綴ったり、なんでもあり。本のタイトル挿借で好き勝手なことを書き、最後の3行で辻褄を合わせたり。

コミュニケーションの場だったし、自己紹介をし続ける場だった。主役は本ではなく、人だった。

読んでくださる方からもたくさんのお便りをいただいた。もちろんジャーナルの感想をいただくこともあったが、読んだ本、観た映画、行った旅行の話。今考えていることが綴られていて、これも知らないあなたを少し知る、ってことだったと思う。

そうそう、当時青山ブックセンターさんも月刊でフリーペーパーを発行しておられて、巻数を重ねても巻数の差が縮まらないのが不思議でたまらなかつた。なんでだろうって。（いや、理由はお互い月刊だから当たり前。分かってはいるんだけどね。）

終わって20数年経って今思うのは、楽しかった、だけ。もちろん仕事もしていたし、結構大変だったとは思いますが、それは覚えていない。

この場で、今までもこれからも友だち、と思える人と出会えた。それだけ、というかそれを得た。

みんなが当事者とか言いながら、結局一番得をしたのは私だったのかな、と思う。

## 定有堂と、二〇二三年の私

高木 善祥

(元・書店員)

自宅から歩いて行ける距離に、本屋が六軒あった。中学生になり自分のこづかいで本を買い始めると、目的によって本屋を使い分けるようになった。何かないかな、と思つたときに足が向くのが定有堂だった。棚から一冊選ぶ。読み終えてまた店に行くと、次に読みたくなるような本がその隣に並んでいる…。？ 店に通う頻度が上がっていくと、隣り合う本や隣り合う棚がゆるくつながっていることに気づく。本は一冊で閉じられておらず、開かれています。もう後戻りはできない。導かれるように、いや実際に導かれて、文学・人文・科学・音楽・映画・芸術・マンガと、興味を広げていった。

幼いころはあまり本を読んだ記憶がなかった自分にとつては、これが本との出会いの原体験だ。だから、定有堂が他の本屋とは違うのはなんとなく理解していたけれど、店主が意図を持って棚を作っているのは、当たり前前だと思つていた。

大学進学で地元を離れ、ナショナルチェーンの大型書店

に初めて行ったときの感想は、「本がたくさん置いてあるだけじゃん、つまんねえな」だった。

大学での専攻は経営学だったが、一般教養の文学の先生や、仏語の先生のところによく遊びに行っていた。学業と本屋・古本屋・レコ屋・古着屋巡りを両立させて、無事に四年で卒業し、地元に戻り書店に就職する。高い志があつたわけではなく、本好きだしまあいいか、程度の軽い気持ちだった。

実際に書店員として店頭に立つようになって、やっと定有堂の異質さに気づく。(ついでに普通の書店を維持する大変さも。某書店さん、二〇年以上前の話ですが生意気言ってますいませんでした)

特集によつては、雑誌の古い号を残して販売し続ける。文庫や新書を出版社で分けるのではなく、単行本と一緒に並べる。単純なジャンル分けではなく、テーマに沿つて本と本、棚と棚をつなげる。それでいて「私がー選びましたー」な押しつけがましきは一切なく、売場に余白があるから、自分の想像力を働かせることができる。それを一つの棚ではなく、店全体でやっている。

「選書」が注目されるようになり、独立系書店が増えた今となつては当たり前のように見えるが、ちょっと想像してほしい。独りよがりにならずにお客さんとの対話を繰り返

返し、自身の考え方と時代の流れをすり合わせながら、四〇年以上本屋を続ける困難さを。しかも、人口が最も少ない地方の、人通りが少ない立地で。そして図書館や公共機関への配達である外回りの仕事も、とても重要な要素だ。外回りの延長線上に店がある、と言い換えた方がより正しいかもしれない。

勤務先の書店で本を買うようになったので、定有堂に行く頻度は下がった。月に一、二度お店に行って、何かないかな、と棚を眺めるのは変わらない。店主の奈良さんがいれば少し立ち話をして、本は買ったり買わなかったり。書店員になってからも二〇数年通い続けた。その間に、六店舗あったうち、定有堂を含めて四店舗が閉店。残る二店舗も雑誌がメインで、書籍売場はほぼ機能していない。歩いて行ける距離に本屋があることの大切さを、いまさら痛感している。

二〇二三年三月、閉店の話が公になる少し前に、奈良さんから勧められた山内志朗『目的なき人生を生きる』（角川新書）を読み終えた。残念ながら、自分にはしつくりとこなかった。けれども、しつくりとこなかった理由や、奈良さんがこれを勧めてくれた理由を考える。「目的なき人生を生きるにはまだ早かった」が、今のところの結論だ。

いつかまた読むタイミングが来るだろう。そんな経験も含めて、読書の楽しさだ。

四月、閉店日当日に行くのはちよつと違う気がして、その前の週末に立ち寄った。定有堂で最後に買った本が、栗澤順一『本屋、地元に生きる』（KADOKAWA）だ。ずつと気になっていたこの本を選んだのは、盛岡のさわや書店に勤める栗澤さんが、店舗ではなく外回りの部署に所属しているからだ。定有堂との共通点や違いを念頭に読んだ。

九月、自分の仕事も振り返りながら、地方で商売をする意味を込めて、朝日新聞の地方版に紹介文を書いた。

十一月、色々と考えた末に、次は何も決めずに、私は長く勤めた書店を退職した。今は定有堂があったビルの二階で開催される読書会に、時々参加している。定有堂はなくなったが、変わらずここは本のある場所だ。

定有堂教室案内サイト

(@ドラマリア)



鳥取あれこれ その八十九

## 「街の本屋」がなくなりました

内田克彦（地域研究家）

若桜橋詰にある定有堂書店が、先月閉店した。奈良敏行さんが開業されたのは一九八〇年一〇月。初対面のとき、好きな作家の話をした記憶がある。

時々寄るうちに誘われたのが、鳥取大学の椎名健教授が手弁当でされた心理学ゼミ、「定有堂教室」の始まりである。その他、定有堂を介して研究会や講演会などが開かれ、当時、初音通りにあった「梅乃井」で遅くまで議論したのは、皆が若かったからだろう。「定有堂まつり」も何回か行われた。若者たちが集まる中で、ミニコミ誌の『リーフレット定有』、『ブックレット定有』、『定有』、『定有堂ジャーナル』が発行され、近年は『音信不通』の発行が続いている。

それまで仕事帰りに寄るのは近所の谷口栄文堂で、駅前富士書店では専門書を購入していた。馴染みとなつて以来、専ら定有堂書店で購入することになり、しかも、毎月定額を支払い、足りない場合はポーンナス時での支払いと、無理をきいて頂いた。一時期は私の蔵書

と定有堂の書棚が似て来たときもあった。店の前に止めた車が駐車違反になって嘆いたこともある。

一九八八年から始まったのが、濱崎洋三先生の「岩波新書を読む会」。私は仕事の忙しさもあって途中で落伍したが、亡くなられた後も「読む会」と名を変えて今も続いている。

奈良さんには、四三年間、本当にお疲れ様でした、ありがとうございました。

今後は、人文書を県立図書館で探していくことになると思うが、どうだろう。

二〇二三年五月に、右の文章を『日本海新聞』のコラム欄に載せて頂いた（文字数の関係で一部カットされた文を、元原稿のままに復元している）。

私が、三月で閉店すると店員さんから告げられたのは、二月一〇日のこと、来る時が来たと思った。多くの人に閉店されることを知ってもらわなければならないかと考え、三月のコラム欄に書いてもいいかと、奈良さんに相談したところ、強く固辞された。その後、四月一八日まで開けられることになって、今度は四月のコラム欄にどうかと尋ねたが、これも固辞された。

いよいよ閉店のときを迎え、五月のコラム欄に書く

ことにした。奈良さんには断りは入れず、原稿を送ったところ、今度は担当アスクが大丈夫かと心配された。「新聞はまちの歴史を刻む役割もあり、多くの人に愛され、一つの役目を果たされた書店が閉じてしまうことを、記事として記録しておきたかった」ため、取材させて頂きたかったが、取材を受けてくれませんでした、と。

さて、定有堂書店がなくなり、他の近隣の書店に行っても配本がないとかあつて、私がこれまでがいかに購入本を定有堂に頼っていたのか、つくづく感じる日々を送っている。言えば、私の読書生活が狭められている感だ。そのため、県立図書館へのリクエストを試みることが増えている。おかげで、図書購入費が激減したというおまけもある。

現在、奈良さんに勧められて、「鳥取あれこれ」と題して連載が続いている。「音信不通」は今号が九〇号、創刊号はさすがに遠慮したものの、二号から毎月延々と原稿を送り続け、今回が八九回となった。

一九八〇年代、「プリントゴッコ」が爆発的に流行っ

た頃、それを活用して一枚ものの『リーフレット定有』<sup>19</sup>が出され、定有堂に集う仲間たちもそれぞれ出し、例えば『戎町通信』では「定有堂印刷局」の設立計画なるものを載せている。私も勧められるままに一回限りで終わった『同時代通信』を出したり、『ブックレット定有』が出されたときには二回ほど寄稿したりしたが、いずれも続かなかつた。自分は何を表現したいのか、書きたいのか、よくわかっていなかったせいもあるし、仕事方面に頭がフル動員となり、それだけの余裕がなかつたのだろう。

現在、この連載「鳥取あれこれ」をまとめて小取舎から発刊する予定にしている。連載が長期にわたり、その後の事情の変化、研究の深化があるため、初期の回の文章に補注を加える作業があり、止まってしまっているのが実情だ。自費出版しようと思いついたのは、もちろん定有堂書店が営業中のときであり、置かせてもらおうと簡単に考えていたのだった。この連載がいままで続くか分からないが、自著を発刊するまでは原稿を送り続けたいと考えている。

# 私にとっての定有堂

古賀 啓三

(アメリカミシガン州在住)

新しい家によろやっど入居することができた。土地の選定、購入からだとはぼ二年を要した。工期は八ヶ月月だという土建屋の空約束を信じ、九月半ばに住んでた家を売り払い路頭に迷う。よくあることですよ、わたしの別のクライアントはレイクサイドの家を借り、新居ができるまでの数ヶ月を大変エンジョイされました、と売却を託した不動産屋。妙案じゃないか！と早速家内と湖畔の仮住まい探しを始め、と書きつつ、業者の言葉を鵜呑みにするのは大概にしなればならない、という「学び」を新たにします。

瓢箪から駒、というか、湖のほとりでのふた月は大いに満喫できた。極めて辺鄙なところで(我々の予算内で探すとそういうところになった)、人も純朴である。一周四キロほどの、湖というより大きな池、といった佇まいなのだ、避暑地でもあるらしく、別荘が立ち並ぶ区域と、そこに住み着いている人々が暮らす区域は明確に分かれている。純朴な人たちが住む区域は後者である。というか別荘区に

は我々以外ほとんど誰もいない。週末、冬支度でボートを水際から引き揚げたり屋敷を閉めに来る人を見かけるくらい。

純朴な人々は全て白人である。ここでの生活で見掛けた有色人種は朝起き抜けに鏡に映る一人だけであった。一日おきに湖の周りを二周走るのだが、こんなふうにつけの素晴らしい環境なのにジョギングなんかするのは鏡で見かける暑苦しい東洋人だけである。ただで体を動かすことに矛盾を感じる人たちなのだと思う。地の人々が住むエリアは一軒おきくらいに「Trump 2024」と記された旗が掲げてあり、やや不穏であったが、トランプ支持者たちはそのうち手を振ってくれたり、雨の中を走っていると、おい、最高のジョギング日和だな、などと声を掛けてくれたりするようになった。

ここでの生活の内訳は、本を読むこと、走ること、書くこと。それだけである。そんな日々を過ごしていると、「最近、ヘンリー・ソーロという人が周辺で話題になっています。『ウォールデン湖』にひとり暮らしした人、というくらい知識です。『ひとり』『暮らし』『自然』『日記』というキーワードで『つながり』をひろげてみようかな、と考えています。ご参加いかがですか？」という七年前の奈良さんのお誘いを思い出し、今回また『町の本屋という物語』

刊行記念特別号にお招きいただき、なんだか振り出しに戻ったかのよう。

冒頭、新居の話をしたが、昨年『家』という小説を書いた。共通するのは年寄りが家を建てる、という点だけで、それを除けば全く無関係である。といいながら、本当に無関係かはよくわからない。最近、あまり深く考えないで書くので、実は密接しているのかもしれない。過度に作爲的になることを避けるため、と言うともっともらしいが、全くの無作爲では小説は書けないので、作爲を抑えた（無）意識の流れに任せて、とは思っているが、その時に身を浸している最大関心事、例えば家を建てる、などというイベントに影響を受けないはずもない。最近、全ての小説は「私小説度」の差こそあれ、つまるところ私小説なんではないか、と思いはじめている。完全虚構こそ創作の極北とし、私小説を卑下していた時期もあったが、物語の元型は私体験に塗れている。

初秋から初冬を水辺で、日毎に様相を変えてみせる湖とその周辺の自然を眺めながらの暮らしは楽しかったが（生まれて初めて鶴の群れを見た）、こんなところに来ても生活の基本は読むことと書くこと、主軸は書くことである。新しい家も、意匠などは家内任せだが、書くことに集中できる環境、という一点だけはこだわった。

うろ覚えだが、大江健三郎が「労働の習慣」なしに小説は書けない、といったような意味のことをどこかに書いていたと思う。芸術に携われない、であったかもしれない。芸術は爆発じゃないのである。画板に原稿を貼り付け、推敲に推敲を重ねる大江の仕事の風景は家内制手工業以外の何ものでもない。

三十五歳、コロラドの短大で美術の教師をしていた頃長女が生まれ、非常勤講師の給料では家族を養えず、LAで「実業」に就くことになる。慣れぬ仕事に鬱屈した日々を過ごしていた折、奈良さんに、定有ジャーナルにアメリカで読んだ本の感想でも書いてみないか、と声を掛けていただいた。何も読んでないんだったらアメリカでの生活のことでもいいから、と。表現の世界から引き剥がされていじけていた僕には小躍りするほど嬉しかった。その後もある毎に書く機会をいただき、毎月何か書くということを楽しみただけではないことも知った。

何はともあれ、毎日書く。

そういう習慣をつけてくれたのが私にとっての定有堂である。

# 「本屋」について考える

板野 円香

(岡山県在住 薬剤師)

「本屋」と聞いて何を思うだろうか。本を売る場所というのが定義であり、「欲しい本が置いてあるか」「最近行っていないか」とかが連想されるイメージであろう。『日本国語大辞典』には「書物をあきなう家／版木を彫つたり印刷したりして製本して売り出す店」とある。新本・古書関係なく紙の書籍を販売している場所―私もおそらく定有堂を訪れる前はそう答えたに違いない。

昔から読書が好きで、小学校二年生の頃、自分の胴体と同じくらいある『果てしない物語』(M・エンデ)を、息を切らしながら抱えて帰った事を今も鮮明に覚えている。読書の趣味については好き好んでというより、そうやってしまった、という方が正しいかも知れない。訥弁な私が代謝の激しいコミュニティで活躍するのは難しく、それらから逃れる策が読書であった。しかし、知らない世界を知覚させてくれる本は魅力的で、特に空間的・時間的制限に捉われない超現実の作品は、自身の抱く空虚さを十分に満た

してくれた。その様な趣向であるため、メインの本棚には、F・カフカ、デイリー・ブッツァーティ、ボルヘス、森博嗣らの本が並び、デスク横の棚には薬理学、疾患ガイドライン、研究論文といった仕事関連の書籍が並ぶ。つまり、陶酔感に浸りたいもの、読む前から目的が明確な類に二分されており、極端な構成であった。

2022年の秋、この日も気分転換のため鳥取の本屋めぐりの旅に出かけていた。県内の書店を何件か回った所で「鳥取来たなら定有堂に行かなきゃ」と声を掛けられる。何名かからその名前を聞いたのでかなりの有名店らしい。「コンセプト書店なのか？まさか一見さんお断りじゃなからうか？」幾分不安はあるものの、ナビを設定し車を走らせる。時間的にも鳥取日帰り旅はこの『定有堂』という書店がラストになるだろう。

鳥取駅から延びるアーケード街をしばらく進むとその看板が見えて来た。中に入るや否や、第一印象は「商店街に似合う硬派な書店」といった感じで、取り扱うジャンルも幅広く、奥にはコミックなんかもあった。次に「個人書店にしては広いな」という印象。私欲を満たし得る、消費されるための本を探して店内をウロウロしていると、棚にネームプレートが貼ってある事に気づく。「出版社」もしくは「本のジャンル」だろう、と思い近づくと、その期待はい

とも簡単に打ち碎かれる。其れは次の様なものだった。『小さな道しるべと自己肯定』『存在を遊戯に変える』『減速すると自由』…。一步引いて棚差しに焦点を合わせる。

生物学や歴史学、哲学書までも横並びでくくられている。種別による陳列ではなく、その本の持つ性質的な観点でもって配置されているようだった。思惟的な棚差しに興味を持った私は、店主の奈良さんに「何でもいいのでお勧めの本を下さい」とお願いする。「そうは言っても、あんまり読まないモノだと困るだろうから…」と奈良さん。事実私は本に関しては雑食なので、大抵面白く読めるのだが、誠実丁寧に生きてきた方の返答をくぐらい、少々恥ずかしくなる。次いで「興味がある分野や、知りたい事ある?」と聞かれ、最近では、病魔に侵された哲学者が九鬼周造の《偶然性の問題》を引きながら病と対峙する作品が面白かった事、ナラティブケアや共同性を学びたいが上手く落とし込めず悩んでいる事を伝える。「それなら」と、当事者研究に関する書籍を三冊紹介頂く。「この三冊を読めば当事者研究について大枠理解できる」との事。更にこう続ける。「A地点からB地点に行くのに正解のルートはない、地点に行けさえすればいい」と。医療者としてのこう或るべき理論を信仰し、可能な限り手を貸すのがケアであると考えていた私は、この一言に衝撃を受けたのであった。

奈良さんの語る言葉は極めてニュートラルである。他者23の意見を否定したり《或るがまま》を《或るべきもの》に変換して主張したりしない。近年、大きな声の人ほど意見が通る社会である。多様性の海で溺れないよう声を上げる事は、ごく自然的な作用なのかも知れない。しかし、こちら側で声を上げる時、必ず対岸も存在するはずであり、同時に、こちらの倫理が相手に通じると確信するのは幻想である。現代社会の裏に、ソラリスの海を連想した。

複雑性を孕んだ社会で『定有堂』が今日まで親しまれ続けてきたのは、奈良さんの「他者」に向き合う姿勢ゆえと考える。一定の《質》を持ち合わせてはいるが、同時に性質上の《限界》も内包している。つまり《定有》している奈良さんであるからこそ、他者の心に響くのだろう。

今一度「本屋」について考える。本屋とはある程度の拡がりを持ったコミュニケーションであり、同時に文化を生む存在である。本屋は存外動的なものであると知る。

今、私の本棚の中段に、定有堂の選書本が異彩を放って並んでいる。今迄海の流れを眺めるのみであったが、そろそろ進もうと決意する。遠くに水先人が見える。舵を切る。

## 不真面目な寄稿者

萩原 俊郎

(倉吉市在住者)

新聞社を退職して少し落ち着いたので、昨年春、長年「封印」していた屋根裏部屋を「オトコの秘密基地」にしようと思いついた。子供も巣立ち、夫婦二人住まいで自分の書斎もあるのに、なぜ家の中に「秘密基地」がいるのか、さっぱり分からないが。

家を建てて三十年近く、せっかく天窓のある屋根裏部屋を作ったのに、断熱が不十分で(夏は灼熱、冬は酷寒)結局、昔の日記から本や雑誌、取材メモ、記事のスクラップブックまで、なんでもかんでも放り込んで片付けた気分になる「ブラックホールの倉庫」みたいになっていた。

で、大工さんが来る前日、片付けのため久々に部屋に入ると、隅の方にブックレットの山が見つかった。今の『音信不通』の前身、一九八八〜九〇年の『定有』、一九九三〜九八年の『定有堂ジャーナル』だった。

◇ ◇ ◇  
当時の寄稿者を見ると、柳文章さんや徳永進さん、椎名健さん、片山正見さん、小谷敏さん、須崎俊雄さん、そして『定有堂ジャーナル』になってからは井狩春男さんが毎回巻頭エッセーを寄せるなど、錚々たる顔ぶれである。  
実は、商店街の中で夜遅くまで開いていた定有堂は、入社当時、近所の戎町(真教寺公園前)のぼろアパートに住んでいた私にとって、亡くなった前のカミさんとの格好の夜のデートスポットだった。

むしろ同期入社のマツヤマ君(東京育ちでサブカルチャーに詳しく、洗練されてカッコよかった)の方が、開店して間もない定有堂と奈良さんの魅力にはまり、「将来は印刷機を購入してミニコミ誌で食っていく」などと言うので心配だったが、やがてふらりと東京に帰ってしまった。

先ほどの錚々たる寄稿者とはかく、なぜ奈良さんは、本屋を彼女との待ち合わせ場所にするようなフラちな新聞記者に声をかけてくれたのか、その経緯が今思い出そうとしても、さっぱり思い出せない。

◇ ◇ ◇  
ただ、茶色に変色しつつある当時の『定有』をめくると、私はかなり「楽しんで書いている」のが分かる。

『定有』③『日本の「ディンクス」は哀しいのだ』

当時はバブル絶頂期。「萩原さん夫婦って、アメリカのディンクス（ダブルインカム・ノーキッズ）子供のいない共稼ぎ夫婦）みたいで、二人で自由にお金が使えていいですね」と後輩に持ち上げられ、気をよくしているところに、大阪で同級生がみんな子持ちの専業主婦になり、しかも優雅に暮らしているのにショックを受けたカミさんが帰宅する。

二人はくだらないことで大げんかになるのだが、ふと、自分たちは二人の給料を合わせてやっとの生活で、子供なんて持てるんだろうか、という「仕方なくディンクス」の部類であることに気づき、「これからもよろしくな」とめでたく仲直りする。「海の方のディンクスたちも案外こんなものではないか」。締め言葉が効いている。

当時の『定有』は半年に一回ぐらいの発行らしく、次回④では、そのカミさんが身ごもっていたことが判明する。『妊夫はつらいよ・春の夢うた編』

早くも子供の名前に思いを巡らしている能天気な夫（私）に、「妻がポロっとつぶやいた。『結婚したら夫か妻か、どっちが妊娠するか分らない、なんていいと思わん?』」そこから、ロシアンルーレットのように夫も妊娠するかも知れない世界の物語が始まる。

夫が上司に妊娠を告げると「キミ、分かっているのか。

この忙しい時に産休かと叱られる。妻だけ友だちとスキーに行き、大きなおなかを抱えて寂しく留守番する夫。

「国会のテレビ中継では、出産間近と伝えられるハマコーが『ポストの数ほど保育所を』とフーフー言いながらドスのきいた声で訴えていた。なんでも衆議院始まって以来の高齢出産らしい」

バカバカしいけど、なかなか面白い。が、文体が今とほとんど変わらないなあ。進歩がないのかしらん。

◇ ◇ ◇

何度か中断はあったものの、三十五年余り、うつぶん晴らしのように新聞で書けない表現、描けない部分を吐き出す場を与えてくれた奈良さんには、感謝の言葉しかない。

よく続いたものと思いが、店を閉じた奈良さんに会って、ある宿題をもらった（内容は恥ずかしいので言わない）。六十代も後半に入った私にはちよつと荷が重い宿題なのだが、「いつか、いつかと思っていたら、人生終わっちゃいますよ」と、とどめを刺された。本当に「人たらしの本屋さん」である。

## 色なき風の吹く本屋

木元 健二

(新聞記者)

むかし、雲州と呼ばれた風土だけある。松江に暮らして三年近く、なるほど雲の多い土地である。宍道湖のほとりなどで雲間から光が差し込む空模様を、時折見かける。ふと足を止めたくなる、そんな情景を「天使の梯子」と呼ぶそうだ。

『季節のかたち』（高橋健司、知恵の森文庫）に、そう記されている。

定有堂で出会った愛読書である。とりわけ日本人が慈しみ、絶妙な呼び名のついた自然現象の数々を、彩り豊かなカラー写真とともに伝えている。感じ入る箇所がいくつもあり、2冊買い求めた。かつては自宅でも職場でも手に取れるようにしていた。今もトイレのかたわらに置き、我が自然現象とともに存在している。

定有堂では、こんな本との僥倖があった。読まねばならぬ、という本が、書棚のどこかに立っていた。

『あしたのジョー』（講談社コミックス）全二十巻を見

かけ、大人買いしたこともある。「これは品薄なものに目をつけましたねえ」。いたずらっぽく笑う奈良さんに、そう告げられたのも懐かしい。

思えば、奈良さんは団塊の世代である。週刊少年マガジンに連載され、若者たちを熱狂させた作品を、現在進行形で読んだのかもしれない。そこは聞きそびれている。

鳥取に勤務した二〇〇六年春から二年間。書棚での出会いだけでなく、奈良さんのおしゃべりもよく弾んだ。無為に過ごす時の豊かき。そんなことを実感できた気がする。毎日のように顔を出したくなかったのは、当然であろう。

一度だけ、奈良さんに取材した折があった。当時連載していた人物コラム（二〇〇八年三月十二日、朝日新聞鳥取版「わたしの鳥取」欄）の最終回にご登場いただくためである。

私の転勤が決まり、六十回ほどの連載は奈良さんで締めくくることがふさわしい、と思ったのだ。渋るのをかきくどき、応じていただいた。

書棚も、最初からうまく並べられたわけではなかった。試行錯誤しながら、だんだんと親しまれるようになった。初めの頃は、客すべての声に応えたい、と辞書も学習参考書も、とできる限り集めた。しかし、総花的な品ぞろえは

誰の心にも響かない、と気づく。五十坪弱に過ぎない店内に、どれだけ広がりをもたせうるか。思案に暮れた末、こう定めたという。

「何でもあるわけではないが、どれでもそろえる」。そんな品そろえに行き着いた。足を運ぶ人々の顔を思い浮かべて仕入れた本を日々、並べ続ける」

シャイな奈良さんからそんな情景を聴かせてもらった。そして手仕事のような営みで築かれた本屋には、鳥取の古き良き土地柄も映っていた。

「古くからの住民が多く、友の友は友、といった互いの顔が見えるような間柄が、いまも生きる。そんなつながりが大切にされる地域で、本好きの集う場として、定有堂の命脈が保たれている。個性派書店、といわれるのが誇りだ。その個性とは、奈良由来のものではない。店のありようは、いったん我を捨て、一から客に教えられた。鳥取で暮らす人々の、感性の表れなのである」

鳥取には野の花診療所という、これも稀有なところがある。二階建て十九床のこじんまりした病院で、治癒の見込みがなくなつた患者が暮らす。二、三日に一度、他界する人々とともに過ごす院長は、ノンフィクション作家でもある徳永進さん。やはり、団塊の世代の人である。

終末期の体の痛みや、心の苦しみを和らげようと、二十七年余り前からホスピスケアに手を尽くしてきた。バーカウンターがあり、お酒もたしなめる。寝てべつて入れる風呂もあり、冬場はゆず湯も。瞑想室もある。ポストもある。患者が旅立ちを前に、残された人に向けてしたためる「未来便」を納めるのだ。言ってみれば「オーダーメイドの終末期」を目指すところである。

野の花診療所と定有堂のありようが、私には重なつて見える。どちらも建物としての構えは小体であるが、主の懐がすこぶる深い。

人生の終幕に近い人も、書店を訪れる人も、求めるものはそれぞれ違う。各人の発する「心の周波数」を感じ取り、求められるものをすつと差し出す。野の花診療所と定有堂の営みは、そんな職人芸の色を帯びている。

### 色なき風

これも『季節のかたち』に載っている言葉である。

「山野を吹く、その様子は見えないが、たしかに秋を感じさせる風。「色なき」とは、華やかな色のないのをいう」読書子がふわりと吹かせる風を、自然体で感じとれるのが奈良さんである。そんな心ばえの優しい本屋だった。思い返すと、心に秋風が吹いてくる。

## 汽水のほとりから (34)

小原 修治

(県立高校教諭 湯梨浜町松崎在住)

『音信不通』に寄稿するようになって三年近くになろうとしている。無論、奈良さんからの依頼で始まったのだが、その時、月に一、二回しか来店されないなら今考えていることを書いて下さいよと言われたように記憶する。確かにあの頃は店に寄るたびに話をしていたし、レジに見えない時も来店を店員さんに知らせてもらい、わざわざ二階から降りて来られるなんてこともあった。それが今はもう店が閉じられ、その場面を再現することができないのだから、あれは本当に貴重な時間だったのだなと思いつ返している。奈良さんは気に入った本を飾らずに教えてくれる人で、そうした本が定有堂の本棚を彩っていたわけだが、無論それは必ずしもPOPを挟んで陳列された所謂「押し本」だけとは限らなかった。奈良さんと親しく接してみると、さりげなく置かれている本の中にも思い入れのある本が多く存在することが理解できるようになった。例えば、奈良

さんはSF小説が好きで、この海外の作家が面白いと紹介して下さる。そう言われて店内をあらためて見ると、その作家の文庫本が平積みしてあることに気づく。ただ、当初、奈良さんとSFとの組み合わせは意外な気がした。

が、それ以上に意外だったのは、奈良さんが月刊『ムー』を好きだと言われたことだった。言うまでもなく、あの、スーパームステリーマガジンの『ムー』である。「実は私、こういうの好きなんですよねえ」と、雑誌コーナーにある最新号を手に取りながら、はにかむようにそう言われた。このようなトンデモ本(失礼!)が好きだと言われたことについては、その率直さに好感を持つとともに、そもそも奈良さんとは何者なのかを知るきっかけになったようだ。これは重要なことを示唆していると思われるからである。奈良さんは一九四五(昭和二十)年生まれで、まさしく全共闘世代と真ん中である。政治の季節と呼ばれた時代に東京で大学生活を送られたわけで、その頃のことを何度もお聞きした。当時の学生運動を取材した新刊が出ると必ず言及し、それらの感想をメールでいただいたこともある。その一節に「変わらなかつた人、変わり続けた人、対照がおもしろいです」とあり、それを目にした時、奈良さんは、変わらなかつた人、変わり続けた人、どっちなのだろうと思つた。ただ、それはどちらがよいという問題ではない。

結論的に言えば、奈良さんは昔から一貫して対抗文化(カウンターカルチャー)の人だと思う。その意味では、変わらなかつた人だったと言えよう。当時の学生運動には対抗文化の側面があり、だからこそ関心があつたはずだ。が、その後、奈良さんが心から関心を示した対抗文化は、政治変革よりも自己変革を指すものだったと思われる。60年代の米国で生まれたカウンターカルチャーもまた、公民権運動や反戦運動などともに盛り上がりを見せた後、70年代にはニューエイジと呼ばれるスピリチュアルな方向へ進んでいった。こうした潮流は日本にも伝播し、若き日の奈良さんにも影響を与えたと思われるのである。

ニューエイジとは、宇宙や生命など未知のものとの遭遇によつて自己の精神世界の向上を目指す思想実践であり、奈良さんがSF小説や『ムー』が好きだと言われるのも、この文脈から理解できよう。また、奈良さんは太極拳教室の先生だが、以前に伺つたところでは、太極拳を学んだ際のバイブルは、津村喬の『氣脈のエコロジー』(創元社)という本のことであつた。津村喬は、70年安保当時は新左翼イデオログとして知られ、80年代には東洋体育を提唱し、後に気功協会を設立した人物である。数年前に亡くなつたが、日本のニューエイジの代表的人物だろう。奈良さんを対抗文化の人とするのはそれだけではない。

何より奈良さんは定有堂開店のずつと前からミニコミ誌を創り続けておられた。以前、「ミニコミは、マスコミに對する言葉なんですよ」とふと漏らされたことがあつたが、マスコミがメインカルチャーであるとすれば、まさにミニコミはカウンターカルチャーである。この点もまた、奈良さんが一貫して対抗文化の人であつたことを物語るものだ。「身の丈」という言葉を口にされるのも、メインカルチャーに毒されるなどという意味だろう。また、地方を拠点としたのも都市文化へのカウンターだったと言える。

ところで、その奈良さんが唱え続けている商店十年説というのがある。個性を發揮する熱量は十年が限界だというのだ。打開策は、他者の個性の最良の部分に触れ、自身を上書きすることだそう。その話を聴き、長年店を続けた奈良さんは変わり続けた人でもあると知つた。そして今、店は閉じて『音信不通』や読書会は続けると決め、他者に触れようとする奈良さんは、まだ変わるつもりだろう。その変化に期待したい。対抗文化の人として自由かつ過激な不逞老人(b y 鶴見俊輔)になつてほしいと願いつつ。

# わたしと定有堂

松田 裕史

(高校教員)

定有堂との真の出会いは、「音信不通」を抜きには語れない。その時の様子を四十八号に次のように書いている。

何を買ったのかは覚えていない。なぜだかその日は、普段は視界に入らないカウンターの向かいに、何か置いてあることに気づいた。

初発衝動、今振り返るとあの日の出来事を一言で言い表すのならばこの言葉以外に見当たらない。「音信不通」を起点として定有堂というピオトープを介した学びが発動したのはあの時だった。二〇二〇年七月二十日発刊の四十八号から奈良さんに誘われて原稿を書き始めた。四十八号には「音信不通という方程式」という文章を二部に分けて書いている。「には次のような詩を掲載させていただいた。

秋雨が

しとりしとりと街中の空気と地面を濡らし

日中に僅かに蓄えられた熱を冷ます

その日、「音信不通」はわたしに誤配された

あなたから差し出された「不通」

「不通」という

見えないテクスト

豊かな沈黙 饒舌な沈思

それは

琥珀の余白

加熱された余熱

喜雨のような慈雨

不通という「問」

折り重なるためらい

それは

マイルドなワイルド・サイド

余韻のブリコラージュ

未来志向の発酵

音信という virus 変異体

不通という culture 培養

音信×不通 音信≠不通

音信の不通累乗 音信の不通微分

ホントウのフツウのハナシをしよう

普通は苦痛

不通は普通

オンラインですれ違い続ける

あなたとわたし

オフライン 不通で出会う

わたしとわたし

音信不通という翻訳不可能語

Correspondence

cor 共

respondence 応答する

遅れた応答達のあいだにある  
不通

あなたとわたしの間にある

過剰な余剰

声なき声

あなたに差し出す余白

世界に瀰漫する

「不通」という名の音信

わたしはあなたからの「不通」を受け取れているだろうか

二〇二三年一月八日、僕はパリのエッフェル塔近くに  
あるユネスコ本部一階 Salon 1 にいた。定有堂からパリへ、  
身の丈からグローバルへ、思えば遠くへ来たものだ。イギ  
リスの教育機関「バーキー財団」が僕が「音信不通」へ寄  
稿していることも評価してくれたのは望外の喜びだった。  
奈良さんから、定有堂から、学びとは何か、教育とは何か  
について多くを学ばせていただいた。ゴールは仮でしかな  
い。ゴールの先にまたゴールが聳え立っている。  
学びの旅は続く。

## 本を作る側から (10)

村瀬 謙介

(小取舎)

今回はわたしの定有堂ということで書き始めるのだが、定有堂で初めて買った本はなんだったかのか思い出せない。子供の頃、家から一番近い木屋さんは横山書店だった。学校帰りにあったのでよくコロコロコミックとかジャンプコミックスなど買っていたように思う。小学校の校区内にあつたので定有堂にも行っていないことにはないと思うのだが、何かを買ったのか、そもそも行ったことがあるのか記憶がない。覚えているのは中学校に上がってから。数学は得意だった。英語がからつきしだったので塾に行っていた。確か夕方六時過ぎから八時までで、数学と英語が学べた。いつもは先に一時間、得意の数学を勉強し、残りの一時間を英語にあてていたのだが、やはり中学時代の村瀬少年は英語学習の要領を得ることができず、次第にサボるようになってきた。あまりに早くサボって帰ると「どうした？塾は？」となるので、英語学習も少しだけはして早めに塾を出て

定有堂に入り浸った。県庁所在地ではあるが田舎な鳥取市では都会ほど夜遊びするような子供はほとんどおらず、夏の土曜夜市やしゃんしゃん祭りや夜の街に出るとワクワクした。中学に上がると部活で帰りが遅くなると秋から冬にかけて暗くなるが、それは僕にとって残業みたいなものだったから少し意味が違う。

その頃(一九九〇年代)の定有堂は夜八時まで営業していた。閉店ギリギリまでいた。親には悪かったが、英語をサボって定有堂に並ぶ本で色々な世界を勉強していた。そう思うと後悔はしていない。改めて定有堂で最初に買った本が何だったか探ってみよう。

「ホワッツマイケル」という猫が主役の漫画。これはひょっとすると横山書店だったかもしれない。北崎拓の漫画「ふ・た・り」は可能性は高い。高校生の男女が駆け落ちする話でこれは中学生時代に買っているはずだ。一九九二年から一九九三年まで週刊少年サンデーで掲載されており、単行本を買っていた間、まだサンデーで掲載されていた記憶がある。ちなみに「ふ・た・り」はまだ捨てずに書棚に残っている。

海外の景色がたくさん載っている写真集も買ったことがあるが、タイトルも忘れ、手元にもないので調べようがない。雑誌という可能性もある。スタジオヴォイスとかCUTとかか。いや、映画少年だったからロードショーやスクリーンの可能性もある。そういえば「アフフォト」という素人や芸能人が撮影した写真をメインとしたカルチャー誌は買っていた。「age」の編集をしていた米原康正氏が作ったこの「アフフォト」もまだ持っている。写真投稿という手法ゆえに今思うと九〇年代のドキュメンタリーとして年々この雑誌が熟成されている感覚がある。創刊号が一九九七年で最後の十一号が一九九九年発行。カルチャーといえはカドカワから出版されたムック「オルタカルチャー」も買った。現代用語集のサブカル版という感じで、もう手元にはないがこれが一九九七年出版。

一昨年、惜しくも亡くなってしまった遊園地再生事業団の宮沢章夫のエッセイや戯曲集も定有堂で買わせてもらった。

もう思い出しているうちに懐かしくなって何を定有堂で一番最初に買ったかなんてどうでも良くなってきた。一番多く買ったのはこれも雑誌で、「エルマガジン」と「Meets

Regional」だろう。これは間違いない。大阪にいる頃から買っていたが鳥取に帰ってきてから買ったのは全て定有堂だった。二〇〇八年に「エルマガジン」は惜しまれつつ休刊してしまったのだが、京阪神の情報誌の枠を越えて、そのキャッチコピーと文章、レイアウトからお店の写真においてまでセンスが高く、無料情報誌を作る仕事をしていた際に大いに役立った。いまだにバックナンバーは捨てられずにたまに引っ張り出すことがある。現在もまだ発行している「MeetsRegional」も「エルマガジン」の出版社である京阪神エルマガジン社の雑誌で、こちらもバックナンバーはデザインの参考書のようなもので捨てられない。

わたしと奈良店主というタイトルで書くには、無料情報誌時代に一度取材をしていただいたこと、そして小取舎を設立し、本を置いてもらうようになってから急接近したので、他の皆様のように濃い思い出話をするには日がまだ浅い。ただ、村瀬謙介という人間を形成するのに定有堂が大きな影響を与えたことは間違いない。

# 一書肆の思い出

ムラカミヒロミ

(フライング・ブックマン)

## 一 ビルヂングの回想(独白)

昭和二十七年の大火で、市街地の三分の二を焼亡、この目抜き通りの商店も一軒残らず焼け落ちた。

防火帯とするため、道路の拡張、建物の難燃化が打ち出され、特別融資も始まった。

このビルヂングも同年中に着工し、二十九年に竣工。鉄筋コンクリート造三階建て。一階は店舗。二階から上は住居である。

店舗には精肉店を入れた。オーナーは、今でいう総合商社のようなもので、市内各所で日用品、酒類、肉製品などを幅広く取り扱い、H産業と称していた。

三十四年、ビルは地元のカス会社の所有となり、一階は同社のサービス・センターになった。レンジや炊飯器、瞬間湯沸かし器、風呂釜などが所狭しと並んでいた。ここが

できたお蔭で、ガス機器の売り上げが一気に伸びたそう。約二十年、この地にあつたが、郊外に新本社ビルが竣工したことから、撤収することとなった。

五十五年、新たにオーナーとなったのが書店であつた。T堂ビルと名付けられた。

## 二 顧客の談話

店に入つてすぐ左に、小さなレジカウンターがありましてね、バック棚との隙間は人ひとりがやっと入れるくらいしかなくて。

男女各一名の店員さんがいらして、女性は名前を失念しましたが、眼鏡を掛け、髪をソバージュにした、はきはきと物を言う方。男性は、エヌ氏といって、東京からUターンして来た人でした。後に、図書館に転職され、本に関するリトル・マガジンを主宰されたりもしました。

赤江瀑ファンという共通の話題もあり(氏は作家の大学の先輩に当たり、直接のお付き合いもあつたようで)、色々な話を聞かせて貰いました。作家デビュー以前の、詩作品については珍しい資料も頂きましたね。

最も長いお付き合いになったのが、エム君とアイさんのお二人。気遣いの行き届いた人達でしたが、始めの頃は客慣れしていない様子で、言葉数も少なく、距離がありました。しかし、何年も顔を合わせていけば、気心も知れるもので、終い頃には、ツー・カーで、話を通じるようになっていましたね。

エム君とは、趣味が似通っていて、特撮映画やTVドラマ、漫画の話などをし、いつも最新の情報を教えてくれました。まめな人で、DVDやCDなどを随分ダビングして貰いました。私も、コンサートなどに出掛けた際、会場限定のグッズなどを持ち帰ったり、昔のファンジンや珍しい音源などをお貸ししたりしました。

アイさんには、客注や取り置きで随分お世話になりました。私は本の美汚にうるさいのですが、美本の取り寄せ・交換などにも嫌な顔をせず、応対してくださった。取り置き本や雑誌についても、入荷日や、配本のあるなし等を親切に教えてくださいましたね。

### ≡ 再びビルディングの独白

令和五年、書肆は閉じられ、四十三年の歴史に幕を下ろした。私も齢七十を数えることとなった。

思えば、竣工当時は街が生き生きしていた。ビルの真横に新道ができ、商店が立ち並んだ。一本北のK通りは、K銀座と呼ばれ、市内一般賑を極めた通りであった。

映画館が二軒、結婚式場、パチンコ店、レストラン、バーラー、大衆食堂、菓子屋、コーヒー店、スーパーマーケットなどが軒を連ね、歳末の誓文払いの頃など、通りは身動きできないほどだった。

年経て、月は流れ、日を送り、今、街は静かである。平日の日中は、病院帰りの老人しか歩いていない。日曜、祝日に至っては、人の姿を探すのも難しく、車でさえ、ほとんど走っていない。

郊外の時代と言われて久しい。成程、郊外店は車の出入りが頻繁で、道路も常に交通量が多く、歩行者には危なっかしい場所であるようだ。

しかし、大量廉価販売も先が見え、リアル店舗の存在意義さえ問われる時代だ。この先、街は、商店は、何処へ向かうのだろうか。

## 本のある場所へ

三浦 永理

(青翔開智中高教員)

「本屋に行くくと、世の中にこれだけの本があるのかって、絶望するんです。自分が知れないことばかりだなんて」とある人が言っていた。

私にとって、本がある場所というのは「これだけ知らないことがある」という「希望」を抱ける場所だったから、同じことでも人は違うように捉えるものだと思う。いや、実は表裏のようなもので、同じことを指しているのかも知れない。何かを知るといふことは、大海に向かうようなものだから。

子どもの頃から電車通学をしていた東京育ちの私は、鞆に本を二冊以上入れる癖が治らない。通学中に本を読むのが習慣化して、本好きになっていった。たまたま実家から数駅のところの大型書店があり、そこで本を買ってもらっていた。本については、両親ともにお金を出してくれるものだから、「田舎の本屋じゃ満足できないんじゃない?」と言われ育ってきた。両親は大学院時代、地方に住んでい

たこともあるので、その時に実感したのかも知れない。本は全国一律の値段で買えるが、どこでも自由に買えるわけではない。時代が変わって、ネット通販が発達したとはいえ、本の場合、手にとって中身が見られないと大きく失望することもある。

本の百貨店のような場所に慣れていた私は、街の本屋に対する思い入れがあるタイプではなかったのは確かだ。ただ、鳥取に引っ越すことになったからにはそんなことは言っていられなくなった。

コロナ発生時期に田舎に移住し、新しく人と知り合うこともなかった私は、定有堂書店の「読む会」に参加したことで、店主の奈良さんに顔を覚えられた。そして、店に行くたびに話しかけられることになる。

定有堂書店は、決して大きな書店ではなく、一フロアしかない。だが、その小さな場に濃縮された棚から、自分では思ってもみなかったキーワードが与えられた。どれもネットだけで本を選んでいたら、読むことはなかったかもしれない。柳父章による日本語表現の研究、ジエンダーという観点から伊藤野枝（というかそれを追いかける栗原康）、ライティングが気になるといふと、井下千以子による『思考を鍛えるライティング教育』（慶應義塾大学出版会）。当事者研究や、ドゥルーズについての本は、「読む会」が

なければ、出会わなかった本の類である。小さな書店に通い、世界の広さに改めて気付かされた。

例えば、細谷功の『「具体」の抽象』トレーニング』（PHP新書）も、「おすすめてですよ」と言われて買った。具体を集めて抽象化する論理的思考の魅力と難しさを伝えている一冊で、その中で筆者は本について語っている。

「抽象度の高いメッセージを出すのは本にしかできないミッションで、これは今後も永久に残ることになるでしょう。全体のつながりやコンセプトブチュアルな全体像を考えるためのネタは、ネットのバラバラなコンテンツだけから発想するのは、困難です。」

そういえば、今の職場に決めた理由も、本があるからだ。勤務する学校は「図書館の中にある学校」をコンセプトに、中心の吹き抜けにある図書館（ラーニングセンター）の周りに、教室が配置されている。廊下に出ると、図書館になっているので、どんなに本が苦手でも、本と顔を突き合わせる六年間を過ごすことになる。

中高と一緒にくくられることが多いが、求められる読書が急成長する期間でもある。子ども向けの本から、中高生向けの本、そして、一般書へ。高校では、県立図書館と連

携し、専門書を読みながら、論文執筆をする。

学校は、今年やつと十周年を迎える。私も、去年から司書教諭として図書館の業務にも関わるようになった。そうすると、まだ本のコレクションは成長の途上にあると実感する。加えて、どう情報と向き合うかを育てる大事な場でもあると感じるようになった。

本で調べるとなると、自分が求めている具体そのままの答えがあるときばかりではない。ネットなら、検索のワードを変えながら、質はまちまちだが辿り着ける答えもあるだろう。本であれば、情報と情報のつながりに気づいて抽象化する力も必要になり、生徒から見ると、タイプが悪いように感じる。加えて、本丸々一冊を読む時間も授業内では取れないので、情報の古いネットのように使われてしまいい、「知りたいことは本の中にはない」と思われる。ネットにこそ欲しい情報がある、と。

そんな時に思い出すのは、あの小さな空間で、さまざま本を差し出していた定有堂である。そして、三十年弱の人生で出会ってきた「本のある場所」の未来を憂い、願う。果たして、「本のある場所」は大海の入り口になり続けるのか。いや、生まれ変わるのか。

## 定有堂と私



あきの素生（くうねるめがね）

こちらに住むことになったとき、前の職場の先輩から、鳥取に行くなら、ぜひこの書店に行ってみて、と教えてもらったのが定有堂書店だった。先輩はシロクマの表紙の『B RUTUS』（七〇九号）を貸してくれた。

鳥取には、元々親戚や知り合いはおらず、観光で数度来たことがあるだけだったが、尾崎放哉の句にどっぷりとはまった学生時代が、自分と鳥取を細い細い糸でつないでいるように感じられた。誰かに言い訳する必要もないのに、その縁だけを両手に握りしめるようにして鳥取に向かおうとしていた。

そんな中、冒頭のように、やさしい人たちが、一本、また一本と鳥取との縁をおすそわけしてくれた。人や場所を紹介してもらい、あたたかい饒を胸に地元を発った。

引越越えてきて、生活が少し落ち着いてきた頃、初めて定有堂書店に足を踏み入れた。数か月前に知ったばかりの「にわか」だったが高揚した。緊張もしていたと思う。ほんの少しの予備知識をひっぱり出しながら、ひとつひとつ

本棚を見て回る。棚板に貼ってある言葉とそこに並んでいる本の関係性を自分なりに読み解こうとして、上擦った頭を空回りさせていた。その中で、尾崎放哉の本を見つけた。小さい子どもたちは知っている絵本を見かけると、この本知ってる、保育園にある、読んだことある、ととても喜ぶ。スーパーなどで友達に出会ったときと同じように喜ぶ。まだ知らないことばかりの世界で、知っているものに会うというのは、大人が考える以上にうれしく、安心するものなのだなと感じる。初めて訪れた定有堂書店で尾崎放哉の本を見つけた自分は、たぶん、そんな気持ちだったのだ。住み始めたばかりの土地で、数少ない目的地、その中で見つけた知っている人、好きな作品。入れ子のようならしきで、今でも強く印象に残っている。ひとしきり店内を回った後に、ふたたび放哉の棚に戻り、文庫本を手にとった。私が初めて定有堂書店で買った本は『放哉評伝』（村上護、春陽堂書店、二〇〇二）。思い出の一冊だ。

社会人になり働き始めた頃、右も左もわからなくて、機会があれば何でも参加してみようと意気込んでいた。ビッグナースラック、というのとは違うかもしれないが、初めて聞きに行った講演会は幸運にも、児童文学者、間崎ルリ子さんのものだった。右も左もわからなかったため、その幸

運に気付いたのは数年経ってからだったのだが。

一番感銘を受けたのは、「センス・オブ・ワンダー」についてのお話だった。子どもたちが世の中のあらゆる事を「不思議だな」と思う感性、そして、それに寄り添う大人の存在の大切さを説かれた。そんな大人でありたい、と強く感じ、以来、折にふれて立ち戻るひとつの理想となっている。もちろん、レイチェル・カーソンの本を読んだ。

ある日、定有堂の中で『センス・オブ・ワンダー』（レイチェル・カーソン、新潮社、一九九六）に出会った。以前読んだものとは装丁が変わっている。より好みの装丁に。放哉の本を見つけたときのようにうれしくなった。でも前に読んでいるし、と一度は棚に戻してお店を出たが、自分にとっては大切な一冊だから手元に置きたい、そしてそれは定有堂で買いたい、と思い直し、後日無事手に入れることができた。

知っている人や場所が少しずつ増えつつも、まだまだ心細い日々を送っていた七月、地元友人が軽トラを駆って遊びに来てくれた。数百キロの道のりである。アパートに横付けされた軽トラに最初は面食らったが、バイクで来ようと思ったんだけど、という言葉に、（安全性の面で）四輪の車で来てくれてよかったと安堵しつつ、友人の豪快さ

に励まされるような気持ちがあった。はるばる訪ねてきてくれた彼女の思いやりに応えたく、一泊二日ではあるものの、三か月で自分が知った鳥取のよいところをめぐらばい案内しようと思った。砂丘、日本海、民芸、温泉。夜はホルそばのおいしいお店で、満天星に舌鼓を打った。

帰り着くまでに数時間かかるため、翌日は午後早く出発する予定だったが、どうしても、最後に定有堂を案内した。彼女は自由に棚を見て回り、ときどき言葉を交わしながら、二人それぞれに気になる本を手に取りながら過ごした。予定していた時間を過ぎても去りがたく、後ろ髪を引かれるように、でも、満ち足りた顔をした彼女は定有堂を出た後、時間の流れ方が違う、来ることができてよかったと言って、軽トラで帰っていった。

てんでに過ごしていたのに、他の場所と同じように、もしかしたらそれ以上に一緒に楽しむことができた。自分が好きなものを友人も好きになってくれたことがうれしかった。

私にとっての定有堂は、あこがれと出会い。口をついて出る鳥取の言葉が増え、この地に幾分か馴染んできた今、ここまでの日々を支えてくれたものの中に、定有堂が確かにあると改めて思う。

## そのものたらしめるもの



ドラメリア (座敷わらし)

ある日の新聞で、国民的アニメの主人公のことが触れられていた。困っている人を助けるために自らの顔を差し出すヒーロー。高校生の頃に偶然彼の誕生日話をテレビアニメで観て、真剣に考え込んでしまったことがあった。みんなのヒーローのアイコン、あのまんまるな笑顔。それを交換しても変わらず同じ彼なのだと言っ。ならば、彼の本質はどこに宿っているのか？ いつもの顔型のパンが別の形になったらどうなるのだろうか。……そのものをそのものたらしめているものが何であるか、などとあれこれ考えていた頃だったのだ。

定有堂を定有堂たらしめているものは何だろうか。定有堂書店が閉店してから、いやその前から、わたしが繰り返して考えている問いだ。あの本屋空間がなくなったことはもちろん寂しい。わたしの鳥取生活は、自宅と職場と定有堂の三点をぐるぐる回るだけで成り立っていたと言っても言い過ぎではない。仕事の上では大きな痛手だし、あの場所

で何の約束もしなくとも当然のように顔を合わせていた人たちとも、よほど能動的に接触をしなければ出会うことがなくなった。

そのようにして、変わったこと、なくなったものはたしかにある。けれど、「定有堂」の核は失われていない。二〇二三年四月十八日から半年が過ぎた今もそう思う。不思議なほどの確信とともに。かつてのわたしを引き寄せた、歩道にこぼれる橙の灯りがなくても。自分に話しかけてきているような本たちがいなくても。ではそれが何であるのかはまだ言葉にならないけれど、今冊子を作って届けているこの行為も、存在をかたちづくるパン生地の一部であるのだろう。



・編集後記：

文具好きとしては、今日知った「ウカムリクリップ」が気に入ります。皆さま、テーマ指定、締切り早め、と無理なお願いにお応えくださり、ありがとうございました。 ドラメリア (編集長)

今回は「わたしの定有堂」という初めてで最後の特集号です。特別寄稿の方々には、懐かしい思い出を呼び起こしていただき、うれしく思いました。

奈良敏行 (発行人)